

4/4 Thu.

第621回 名曲シリーズ
サントリーホール 19時開演
POPULAR SERIES No.621 / Suntory Hall 19:00

指揮
Conductor
ピアノ
Piano
コンサートマスター
Concertmaster

ラモー
RAMEAU

ショパン
CHOPIN

[休憩]
[Intermission]

ストラヴィンスキー
STRAVINSKY

鈴木優人 *-p.5*
MASATO SUZUKI
レミ・ジュニエ *-p.8*
RÉMI GENIET
小森谷巧
TAKUMI KOMORIYA

歌劇〈優雅なインドの国々〉組曲
(鈴木優人編) [約8分] *-p.10*
"Les Indes galantes" Suite (arr. M. Suzuki)
I. Contredanse II. Tambourins III. Premier Air pour Zephyre IV. Air
pour Borée et la Rose V. Danse du Grand Calumet de Paix
Exécutée par les Sauvages VI. Musette en Rondeau

ピアノ協奏曲 第2番 ヘ短調 作品21 [約32分] *-p.11*
Piano Concerto No. 2 in F minor, op. 21
I. Maestoso
II. Larghetto
III. Allegro vivace

バレエ音楽〈ペトルーシュカ〉(1947年版) [約34分] *-p.12*
Pétrouchka (1947 version)
I. 謝肉祭の日 ー
II. ペトルーシュカの部屋 ー
III. ムーア人の部屋 ー
IV. 謝肉祭の日の夕方とペトルーシュカの死

4/17 Wed.

第587回 定期演奏会
サントリーホール 19時開演
SUBSCRIPTION CONCERT No.587 / Suntory Hall 19:00

指揮
Conductor
ヴァイオリン
Violin
特別客演コンサートマスター
Special Guest Concertmaster

トゥール
TÜÜR

ストラヴィンスキー
STRAVINSKY

[休憩]
[Intermission]

武満 徹
TAKEMITSU

シベリウス
SIBELIUS

オラリー・エルツ *-p.6*
OLARI ELTS
ヴィルデ・フラング *-p.8*
VILDE FRANG
日下紗矢子
SAYAKO KUSAKA

幻影 (共同委嘱作品／日本初演) [約13分] *-p.14*
Phantasma (YNSO co-commission, Japan premiere)

ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 [約22分] *-p.15*
Violin Concerto in D major
I. Toccata
II. Aria I
III. Aria II
IV. Capriccio

星・島 (スター・アイル) [約6分] *-p.16*
Star-Isle

交響曲 第5番 変ホ長調 作品82 [約30分] *-p.17*
Symphony No. 5 in E flat major, op. 82
I. Tempo molto moderato – Allegro moderato
II. Andante mosso, quasi allegretto
III. Allegro molto

4/27 Sat.

第216回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
SATURDAY MATINÉE SERIES No.216 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

4/28 Sun.

第216回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
SUNDAY MATINÉE SERIES No.216 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

指揮
Principal Guest Conductor
チェロ
Cello
コンサートマスター
Concertmaster

プロコフィエフ
PROKOFIEV

カサド
CASSADÓ

[休憩]
[Intermission]

ムソルグスキー (ラヴェル編)
MUSSORGSKY (arr. RAVEL)

コルネリウス・マイスター (首席客演指揮者) -p.7
CORNELIUS MEISTER

上野通明 -p.9
MICHIAKI UENO

長原 幸太
KOTA NAGAHARA

交響曲 第1番 ニ長調 作品25《古典》 [約14分] -p.18
Symphony No. 1 in D major, op. 25 "Classical"
I. Allegro
II. Larghetto
III. Gavotte : Non troppo allegro
IV. Finale : Molto vivace

チェロ協奏曲 ニ短調 [約30分] -p.19
Cello Concerto in D minor
I. Allegro non troppo
II. Andante con sentimento austero

組曲《展覧会の絵》 [約35分] -p.20
Pictures at an Exhibition
プロムナード - I. グノームス (こびと) - プロムナード
II. 古城 - プロムナード III. テュイルリリー (遊びの後の子供たちの喧嘩)
IV. ビドロ (牛車) - プロムナード V. 殻をつけた雛鳥のバレエ
VI. サムエル・ゴールデンベルクとシュムイレ (金持ちのユダヤ人と貧しいユダヤ人)
VII. リモージュ (市場) -
VIII. カタコンブ (古代ローマの地下墓地) - 死せる言葉による死者への呼びかけ
IX. 鶏の足の上の小屋 (バーバ・ヤガー=民話上の妖婆) -
X. キエフの大門

指揮

鈴木優人

MASATO SUZUKI, Conductor

多才な活躍を見せる 新時代のホープ



©Marco Borggreve

マルチな才能とあふれるセンスで時代を切り拓く日本が誇る次世代の旗手が、ラモーからストラヴィンスキーまで、時代の革命児たちの音楽を並べた。多分野で八面六臂の活躍を見せる気鋭の鮮烈なタクトで、新シーズンの幕が開ける。

1981年オランダ生まれ。東京芸術大学作曲科を経て、同大学院古楽器科修了。オランダ・ハーグ王立音楽院修了。指揮者として国内外のオーケストラと共演するほか、鍵盤奏者(チェンバロ、オルガン、ピアノ)としても活躍している。音楽監督を務めるアンサンブル・ジェネシスでは、オリジナル楽器でバロックから現代音楽まで意欲的なプログラムを展開している。

2015年にはラ・フォル・ジュルネ・オ・ジャポンでバッハ・コレギウム・ジャパン(BCJ)を指揮したバッハ《マタイ受難曲》で高い評価を得ており、17年にはモンテヴェルディの歌劇《ポッペアの戴冠》を指揮して絶賛された。昨年9月にはBCJの首席指揮者に就任。また、昨年からの世界的ヴィオラ奏者タメスティとのデュオでチェンバロを弾く「バッハ・プロジェクト」を開始し、今夏にはヴェルビエ音楽祭やシュレスヴィヒ=ホルシュタイン音楽祭などに出演する。

作曲家としても活躍するほか、13年からスタートした調布国際音楽祭のエグゼクティブ・プロデューサーを務めるなど、多岐にわたり活動している。第18回ホテルオークラ音楽賞受賞。NHK・FM「古楽の楽しみ」にレギュラー出演中。読響には16年6月《読響アンサンブル・シリーズ》で鮮烈なデビューを果たし、17年8月《三大交響曲》で成功を収めた。

4/4
名曲

指揮

オラリー・エルツ

OLARI ELTS, Conductor

名曲に新たな光を当てる
エストニア出身の実力派

©Marco Borggreve

室内アンサンブルからオペラまで幅広く活躍し、創意に富んだプログラムと確かな音楽解釈で国際的に注目を浴びているエストニアの鬼才が登場。今回は、祖国を代表する現代作曲家トゥールの新作をはじめ、四つの近現代作品を取り上げてその手腕を発揮する。

1971年エストニアの首都タリン生まれ。2000年にシベリウス国際指揮者コンクールで優勝し、翌年にラトヴィア国立響の首席指揮者として国際的なキャリアをスタートさせた。ヘルシンキ・フィル、ブルターニュ管、スコットランド室内管の首席客演指揮者を経て、現在はエストニア国立響の首席客演指揮者、キュミ・シンフォニエッタのアーティスティック・アドヴァイザーの地位にある。これまでにウィーン響、北ドイツ放送響、BBC 響、バーミンガム市響、リヨン国立管、フランス国立管、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管、デンマーク国立響、フィンランド放送響などに客演している。

現代作品やバルト3国出身の作曲家を積極的に取り上げる一方、近年ではオペラでも成果を収めており、ノルウェーでチャイコフスキー〈エフゲニー・オネーギン〉、フランスでベルリオーズ〈ファウストの劫罰〉を上演したほか、エストニア国立歌劇場のブリテン〈アルバート・ヘリング〉で絶賛を博した。現代音楽のアンサンブルNYXDを創設し、指揮と芸術監督を務めるなど、同時代の音楽にも注力している。録音でも、トゥール、エツェルらエストニアの現代作曲家の作品を多数リリース。読響とは16年以来、3度目の共演となる。

指揮

コルネリウス・マイスター

(首席客演指揮者)

CORNELIUS MEISTER, Principal Guest Conductor

ドイツ期待の新鋭が振る
華麗なる〈展覧会の絵〉

©読響

昨年9月にカンブルランの後任として、シュトゥットガルト歌劇場の音楽総監督に就任し、ワーグナー〈ローエングリン〉(新演出)で大きな成功を収めたドイツ期待の新鋭。読響首席客演指揮者としての3年目を迎えた今回は、名曲〈展覧会の絵〉で輝かしいサウンドを響かせる。

1980年ドイツ・ハノーファー生まれ。ハノーファー音楽大学でピアノと指揮を学び、21歳でハンブルク国立歌劇場にデビューを果たした。2005年に24歳の若さでハイデルベルク市立劇場の音楽総監督に就任し、12年までその職を務めた。10年から18年まではウィーン放送響の首席指揮者兼芸術監督として、古典派から数々の現代作品までを指揮・録音し高く評価された。読響とは14年に初共演し、R. シュトラウス〈アルプス交響曲〉で大成功を収めて以来、スケールの大きな演奏を聴かせてきた。

これまでにロイヤル・コンセルトヘボウ管、バイエルン放送響、パリ管、北ドイツ放送響など世界の一流楽団に客演している。オペラにおいてもウィーン国立歌劇場、ドレスデン国立歌劇場、ミラノ・スカラ座、英国ロイヤル・オペラ、バイエルン国立歌劇場、ベルリン・ドイツ・オペラ、チューリヒ歌劇場などで活躍。日本では06年に新国立劇場でベートーヴェン〈フィデリオ〉を指揮した。今年1月にはメトロポリタン歌劇場にモーツァルト〈ドン・ジョヴァンニ〉でデビューし、来年2月にも同〈フィガロの結婚〉を振る。録音は、ハイドンやモーツァルトなど古典派の作品から、ドビュッシー、ストラヴィンスキーなど近代の作品まで数多くリリースしている。



©Jean-Baptiste Millot

ピアノ

レミ・ジュニエ

RÉMI GENIET, Piano

瑞々しい感性で世界各地の聴衆を魅了するフランスの新星。史上最年少でボン国際ベートーヴェン・コンクールに入賞し、わずか20歳で2013年のエリザベート王妃国際コンクール第2位に輝いた。これまでにクリヴィヌ、デ・ワールト、ローレルらの指揮で、サンクトペテルブルク・フィル、スイス・ロマンダ管、ベルギー国立管、イル・ド・フランス国立管、ルクセンブルク・フィルなどと共演している。世界各地でリサイタルを開催するほか、ラ・ロック・ダンテロン音楽祭、ラ・フォル・ジュルネ音楽祭、モンペリエ音楽祭、コルマル音楽祭など国際的な音楽祭にも定期的に登場。15年にリリースしたデビューCD『オール・バッハ・アルバム』は、フランスの権威ある年間最優秀ディアパゾン・ドール賞を受賞した。今回が読響初登場。

美しい音色と豊かな音楽性で、世界中の音楽シーンから引く手あまたの名手が読響に初登場。1986年ノルウェー生まれ。ブラッハー、チュマチェンコに師事。2012年にクレディ・スイス・ヤング・アーティスト賞を受賞し、ルツェルン音楽祭でハイティンク指揮ウィーン・フィルと共演して大きな話題を集めた。これまでにヤンソンス、エッセンバッハ、テミルカーノフ、ラトル、ゲルギエフ、サロネンら巨匠の指揮で、ベルリン・フィル、ロンドン響、バイエルン放送響、パリ管、クリーヴランド管などと共演している。ザルツブルク音楽祭、BBCプロムス、ブラハの春音楽祭などにも招かれ、アルゲリッチ、クレーメル、バシュメットらとも共演を果たしている。録音はワーナー・クラシックからリリースしており、数々の賞を受賞。



©Marco Borggreve

ヴァイオリン

ヴィルデ・フラング

VILDE FRANG, Violin



©Masayuki Ikeda

チェロ

上野通明

MICHIAKI UENO, Cello

同時代の傑出した才能として注目を浴びる大器。1995年パラグアイ生まれ。5歳からチェロを始め、幼少期をスペインで過ごす。13歳で若い音楽家のためのチャイコフスキー国際音楽コンクールで日本人として初めて優勝。ルーマニア国際音楽コンクール最年少優勝。ブラームス国際コンクール第1位、ルトスワフスキ国際チェロコンクール第2位など輝かしい受賞歴を誇る。これまでにロシア国立響、ワルシャワ・フィル、東響、東京フィル、新日本フィルなど国内外の楽団と共演を果たすほか、カザルス音楽祭、ヴェルビエ音楽祭などにも参加している。桐朋学園ソリスト・ディプロマ・コースで毛利伯郎に師事し、現在はドイツのデュッセルドルフ音楽大学にてピーター・ウィスベルウェイに師事している。今回が読響初登場。

現代エストニアを代表する作曲家。1959年生まれ。タリン音楽高校でパーカッションとフルートを、タリン音楽院で作曲を学ぶ。ヤーン・ラーツ、レポ・スメラらに師事。プログレッシブ・ロックのバンド「イン・スパ」を79年に立ち上げ、83年まで活動した。92年からはフリーの作曲家として活動し、ウィーン響、パリ管、ロイヤル・コンサートヘボウ管など世界の一流楽団や演奏家から委嘱されて数多くの作品を作曲している。作品は声楽曲から室内楽曲、オペラまで幅広く、ビッグ・バンドとエレクトリック・ギターを用いた交響曲第5番や、アコーディオン協奏曲〈プロフェシー〉など意欲的な試みも多い。エストニア文化賞ほか受賞歴多数。エストニア白星勲章受章。録音も多い。

エリッキ=スヴェン・トゥール (作曲家)

ERKKI-SVEN TÖÖR, Composer



©Ave Maria Moistlik

ラモー

歌劇〈優雅なインドの国々〉組曲（鈴木優人編）

ジャン＝フィリップ・ラモー（1683～1764）は、フランス・バロック・オペラを代表する作曲家のひとり。ラモーがオペラに取り組んだのはようやく50歳を迎えてから。オルガニストとして、また理論家として名を成していたラモーだが、オペラ作曲家への野心を失わず、1733年に最初のオペラ〈イポリトとアリシ〉を発表して、成功を収めた。それから2年後、続いて発表したのがプロローグと4幕からなるオペラ・バレ〈優雅なインドの国々〉。ルイ・フズリエによる台本は、愛をテーマにしたオムニバス・ドラマといった体裁がとられている。

オペラ・バレとは、それぞれ独立したストーリーを持った複数の幕で構成され、各幕にはストーリーとは直接関係しないバレエの場面が挿入される舞台演目。カンブラが1697年に〈優雅なヨーロッパ〉で創始した。カンブラの〈優雅なヨーロッパ〉に対して、ラモーが書いたのは〈優雅なインドの国々〉。といっても、これはインドを舞台とした物語ではない。ここでいうインドとは、ヨーロッパから遠く離れた異国をあらわす言葉。愛の神がキューピッドを遠い国々へと旅立たせると、トルコでは解放された女奴隷が恋人と結ばれ、ペルーでは王女がスペインの士官と愛し合い、ペルシャでは王子が女奴隷に恋をする。北米の未開の地では酋長の娘がヨーロッパ人士官に魅了される（つまり、今でいうインドは出てこない）。18世紀初頭といえば『千一夜物語』がガランの翻訳でフランスで大流行した頃だが、この〈優雅なインドの国々〉にも当時の異国趣味の流行が反映されている。

今回はこのオペラ・バレから、指揮の鈴木優人により「コントルダンス」「タンブーラン」「ゼフィール（西風の神）のためのエール」「ボレ（北風の神）と薔薇のエール」「未開人の和睦のパイプの踊り」「ロンド形式のミュゼット」の6曲が選ばれ、原作のオペラ・バレとは異なる順に配置される。ミュゼットとはバグパイプ風の牧歌的な舞曲。陽気なコントルダンスをはじめ、朗らかで痛快な小曲が続く。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1735年（歌劇）／初演：1735年8月23日、パリ、バレ・ロワイヤル／演奏時間：約8分
楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、太鼓、チェンバロ、弦五部

ショパン

ピアノ協奏曲 第2番 ヘ短調 作品21

1829年7月、ウィーンを訪れたフレデリック・ショパン（1810～49）は、ケルントナートーア劇場で演奏会を開いて大評判を呼んだ。ウィーンでの活躍はワルシャワの新聞でも報じられ、故国でのショパンに対する期待を一段と高めた。ぜひワルシャワでもショパンの演奏を聴きたい。そんな人々の求めに応じて、1830年3月にショパンの演奏会が開催されることになった。この公演のために用意されたのがピアノ協奏曲第2番ヘ短調である。出版順に従って「第2番」の番号が与えられたが、作曲順では第1番よりもこちらが先に書かれている。

「演奏前の3日間がどれほど辛いものか、わからないだろう」（ショパンから親友ティトゥスへの手紙）という作曲者の心配に反し、公演は大成功を収めることになった。現地の外国特派員新聞は「ピアニストとしては情感の繊細さと審美眼の洗練においてフンメルをも凌駕する。作曲家としても一流の水準にある。やがてポーランドもヨーロッパ最大の演奏家と作曲家のひとりとなる名誉にあずかることだろう」と、鋭くもショパンの才能を見抜いている。

第1楽章 マエストーソ やさしい問いかけに決然と答えるかのような管弦楽の第1主題で開始される。オーボエが憧憬に満ちた第2主題を奏でる。入念な提示部の末に独奏ピアノが登場し、華麗な名技性を発揮しながら情感豊かな楽想をくりひろげる。

第2楽章 ラルゲット 夢想するかのような甘美なロマンس。ショパンが「理想の女性」と呼んだコンスタンツィヤ・グワトコフスカへの想いが込められている。

第3楽章 アレグロ・ヴィヴァーチェ 独奏ピアノによる民俗舞曲風の主題で開始され、管弦楽が応答する。独奏ピアノが優美で技巧的なパッセージを次々とくりだす。弦楽器のホルン・レーニョ（弓の木の部分で弦を叩く奏法）が登場するのが特徴的。ひなびた調子のホルンのソロが、きらびやかな終結部を予告する。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1829～30年／初演：1830年3月17日、ワルシャワ／演奏時間：約32分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン、ティンパニ、弦五部、独奏ピアノ

ストラヴィンスキー

バレエ音楽〈ペトルーシュカ〉(1947年版)

このバレエの主人公は、命を吹き込まれた人形のペトルーシュカ。古来、生命を宿した人形の話は数多い。チャイコフスキーの〈くるみ割り人形〉、ドリーブの〈コッペリア〉、ディズニー映画でも知られる「ピノキオ」、ホラー映画「チャイルド・プレイ」等々。これらの物語において、人形とはつまるところ少年なり少女なりの人間自身を暗に示している。ペトルーシュカ(ピョートル、つまり英語名ピーターの愛称)というありきたりな名前を持った人形の役どころは、恋に破れる哀れな道化役。つまり、どこにでもいるだれかの物語だ。

ディアギレフ率いるロシア・バレエ団のためにバレエ音楽〈火の鳥〉を作曲したイーゴリ・ストラヴィンスキー(1882~1971)は、〈火の鳥〉の最後の数ページを書き上げる段階で、すでに続く題材として〈春の祭典〉を着想していたという。しかし、1910年、家族とともにスイスに赴いたストラヴィンスキーは、〈春の祭典〉の完成には長期間が必要だと感じ、これに取りかかる前に、まず一種のピアノ協奏曲のような作品を書いて「気晴らしをしよう」と考えた。曲を書いていると、ストラヴィンスキーの脳裏に、突如として操り人形の姿が浮かんだ。命を吹き込まれた人形が悪魔のようなアルペジオでオーケストラを苛立たせ、オーケストラはファンファーレの脅しで人形に対抗する。恐ろしい格闘の末に、人形は敗れ、哀れな姿で倒れる。人形の名前はなんと付けようか。そうだ、ペトルーシュカだ! ありふれた冴えない男が主人公だ。

まもなくディアギレフに〈春の祭典〉のスケッチの代わりに、作曲したばかりの〈ペトルーシュカ〉の音楽(後の第2場の原型)を聴かせたところ、ディアギレフは大いに気に入り、この曲をバレエに発展させるようにストラヴィンスキーを説得した。気晴らしのピアノ協奏曲として構想された作品は、こうしてバレエ音楽へと姿を変えたが、ピアノの活躍に当初の着想の痕跡が残っている。台本の作成にはアレクサンドル・ブノワの協力を得た。

バレエの初演は、1911年にミハイル・フォーキンの振付により行われた。1947年にストラヴィンスキーはオーケストラの編成を4管編成から3管編成へと縮小した改訂版を残している。本日演奏されるのはこちらの1947年版である。

第1場 謝肉祭の日 物売りが声を張り上げるようなフルートとともに、賑やかな市場の様子が描かれる。木管楽器が手回しオルガンを模す。小太鼓の連打とともに喧噪が止むと、魔法使いがフルートを吹いて、ペトルーシュカ、ムーア人、バレリーナに命を与える。人形たちは陽気にロシアの踊りに興じる。太鼓連打で次の場面に移る。

第2場 ペトルーシュカの部屋 人形部屋に投げ込まれたペトルーシュカ。寂しげなペトルーシュカのもとにバレリーナがやってくる。バレリーナに恋心を抱くペトルーシュカだが、まったく相手にされない。哄笑するような金管楽器に続いて太鼓が連打され、次の場面へ。

第3場 ムーア人の部屋 たくましいムーア人のもとにバレリーナがやってくる。やがてふたりはワルツを踊り出す。嫉妬したペトルーシュカがふたりをじゃましようとするが、逆にムーア人に追い出されてしまう。

第4場 謝肉祭の日の夕方とペトルーシュカの死 さまざまな旋律が入り乱れて市場の喧騒が描かれる。活発で色彩感あふれるクライマックスを迎えた後、トランペットの叫び声が聞こえる。ペトルーシュカはムーア人に追われ、剣で刺される。魔法使いが死んだペトルーシュカを担いで去ろうとすると、ペトルーシュカの亡霊があらわれる。おののいて逃げ去る魔法使い。弦のピッツィカートで静かに曲を閉じる。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲: 1910~11年、1946~47年改稿/初演: 1911年6月26日、パリ、シャトレ座(初稿)/

演奏時間: 約34分

楽器編成/フルート3(ピッコロ持替)、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(大太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、小太鼓、タンブリン、シロフォン、銅鑼)、ハープ、ピアノ、チェレスタ、弦五部

トウール

幻影 (キュミ・シンフォニエッタ、エストニア国立響との共同委嘱作品／日本初演)

※作曲家自身による解説を掲載しています。

もし私の父が偶然ラジオでベートーヴェンの〈コリオラン〉序曲を聴けなかったなら、私が作曲家になることもおそくなかっただろう。それは第2次世界大戦中のことで、当時少年だった父は、その体験に度肝を抜かれたようだ。何しろ、このような音楽が存在するということ自体、まったく知らなかったのだ。その時から父は、このベートーヴェンという人物はいったい何者で、他にどんな曲を書いているのか、意識的に情報を集めるようになった。そのようにして、父は少しずつクラシック音楽の遺産全体を見出していったのだ。私が生まれる頃には、父は当時としてはかなり立派なレコードのコレクションをそろえていた。そして、そのような環境で私は育った——父が絶えず聴いていた楽曲が生み出す音の世界のなかで。

〈幻影 (Phantasma)〉を作曲する前、私は指揮者のオラリー・エルツ (本作を作曲するうえで彼は重要な契機を与えてくれた) から、私が何らかの形で「ベートーヴェンとのつながり」を作曲できないか、と多くのオーケストラに尋ねられているという話を聞いた。そして、上に述べたような事情があり、ベートーヴェンへ恩返しをする機会として、この「つながり」は極めて自然な形で生み出された。これはベートーヴェンへのオマージュである。

〈コリオラン〉からのモチーフが亡霊のように忍びやかに現れ、現れたときと同じように密やかに消えていく。そのモチーフは〈コリオラン〉のメロディーなどではなく、作品そのものの主構造を基にしているため、聴く人はこの作品を知り尽くしていない限り、そうと気づくことはないかもしれない。しかし、それが分かれることがゴールではない。音楽の筋立てとしては、最初は別々の和音同士のつながりで始まり、次第にそれらが融合し動きはじめ、リズムの密度が増していく。別のヒントとしては——管セクションに少しずつずれて同じパターンの音型が聞かれる頃には、亡霊 (幻影) はすでに現れている。そして、私が他の作品ではあまり使用しないある種のリズムパターンによって、その存在が強調されていく。

エリッキ=スヴェン・トウール

作曲：2018年／初演 (予定)：2019年4月3日、コトカ (フィンランド)／演奏時間：約13分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2 (コントラファゴット持替)、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、打楽器 (トライアングル、レインスティック、ヴィブラフォン、シロフォン、クロティル、ドラムセット、コイルドスプリング、ゴング、銅鑼)、ピアノ、弦五部

ストラヴィンスキー

ヴァイオリン協奏曲 二長調

イーゴリ・ストラヴィンスキー (1882～1971) のヴァイオリン協奏曲二長調は、彼の創作の中期、新古典主義時代の作品である。〈春の祭典〉(1913年初演) でパリの音楽界に大旋風を巻き起こしたストラヴィンスキーは、第1次世界大戦後にゆるやかに新古典主義に転じると、楽器の組み合わせや響きを追求した作品を書き、ジャズの語法に関心を寄せ、ピアニストとしても活動した。それでもまだ、自分の手の内に入っていないからと弦楽器の協奏曲やソナタの作曲には慎重だった。しかし、1930年にショット社の取締役の紹介で、ポーランド出身のアメリカのヴァイオリニスト、サミュエル・ドゥシュキンと知り合ってから、彼の協力もあって自信を得ることができ、ヴァイオリンのための作品が続けて作曲された。

ある日、ストラヴィンスキーはドゥシュキンと食事中に、テーブルにあったペーパー・ナプキンに三つの音を書いて同時に演奏できるか聞いた。ドゥシュキンは難しいと答えたが、その後、可能であるとわかり電話で伝え、作曲家は大いに喜んだという。このとき示した11度音程を含む和音は、各楽章の冒頭で、ストラヴィンスキーの言葉を借りれば「パスポート」のように鳴り響き、曲全体の要となる。1931年早々に着手され、順調に作曲は進み、9月末に完成した。初演は、ドゥシュキンの独奏と作曲家自身の指揮によって、ベルリン放送局で行われた。

全体は4楽章で構成され、各楽章にバロック時代の組曲を思わせるタイトルが付されている。**第1楽章 トッカータ** 独奏ヴァイオリンの和音に続いて、リズムカールに進行する色彩豊かなオーケストラの間を、独奏楽器が自在に駆け抜ける。**第2楽章 アリアI** 独奏ヴァイオリンが音域の広いエキセントリックな主題を奏する。中間部はリズムの変化が多彩で独奏ヴァイオリンの技巧も際立つ。**第3楽章 アリアII** 独特の哀しげな旋律が、ドラマティックに歌われる。**第4楽章 カプリッチョ** 独奏ヴァイオリンが華やかな技巧を絶え間なく披露する。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1931年／初演：1931年10月23日、ベルリン／演奏時間：約22分
楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット3 (エスクラリネット持替)、ファゴット3 (コントラファゴット持替)、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器 (大太鼓)、弦五部、独奏ヴァイオリン

武満徹
星・島 (スター・アイル)

ストラヴィンスキーは1959年4月に来日を果たし、訪れたNHKで偶然、無名の若手作曲家の作品のテープを聴き、絶賛した。その作曲家こそ武満徹(1930~96)であった。武満はほとんど独学で作曲を学び、1951年に画家や詩人たちと「実験工房」を結成し、ストラヴィンスキーが絶賛した〈弦楽のためのレクイエム〉(1957)で音楽界に登場した。戦後の欧米の音楽の影響を受けながら、創作活動が続けていき、日本の伝統楽器と現代音楽の語法を融合させた、琵琶と尺八、オーケストラのための〈ノヴェンバー・ステップス〉(1967)が海外で高く評価され、国際的な作曲家としての地位を確立した。

独自の洗練された技法で数々の作品を発表し、ヴァイオリンとオーケストラのための〈遠い呼び声の彼方へ!〉(1980)からロマン的な作風に傾いていく。この作品の直後、アマチュアの団体のための作品が2曲書かれた。そのひとつ〈星・島(スター・アイル)〉は、早稲田大学の創立100周年を記念して「巣立ち行く若人のために」作曲された。武満によると、早稲田(waseda)から引き出された四つの音As-E-D-A(ラ・ミ・レ・ラ)が、モチーフとして用いられている。「音楽は、希望の水を掬みあげ、それをひかりに変える。この作品は希望をあらわしている」(武満徹)。1982年10月21日、岩城宏之指揮の早稲田大学交響楽団によって初演された。

冒頭、金管楽器のコラールを背景に、ホルネットが4音モチーフを奏でる。このモチーフには、完全5度(レとラ)と増5度(ラとミ)の二つの音程が含まれ、その差異が陰影を作り出す。4音モチーフは、そのままのかたちで、あるいはかたちを変えて再現される。音楽はゆるやかに流れ、各楽器の響きの美しさや表情が現れ、豊かな響きでまとまりそうになるが、時折挟まれる全楽器の強烈な音響が、その距離を、星と島の遠い隔たりを感じさせる。なお武満によれば、この曲は、〈遠い呼び声の彼方へ!〉の序奏として演奏することもできるという。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1982年／初演：1982年10月21日、東京／演奏時間：約6分

楽器編成／フルート3(ピッコロ、アルトフルート持替)、オーボエ3(イングリッシュ・ホルン持替)、クラリネット3(バスクラリネット、エスクラリネット持替)、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、ホルネット、トロンボーン3、チューバ、打楽器(太鼓、トムトム、シンバル、サスペンデッド・シンバル、クロティル、ヴィブラフォン、シロフォン、銅鑼)、ハープ2、チェレスタ、弦五部

シベリウス
交響曲 第5番 変ホ長調 作品82

「交響曲第5番のための、すばらしい主題を見つけた」(1914年7月29日)と日記に記したジャン・シベリウス(1865~1957)は、同じ日「戦争が始まった」とも書いている。フィンランドは直接関与しなかったが、第1次世界大戦で緊迫する時代、シベリウスは新作の交響曲の構想を練り、翌年の自身の50歳の誕生日祝賀行事に向けて作曲を開始した。1915年4月には「今日、16羽の白鳥を見ました。人生で最高の経験のひとつ! 自然の神秘と人生の苦悩! 第5交響曲の主題：トランペットのレガートにすること」と記している。白鳥の姿や鳴き声、自然の情景からも着想を得て書かれた第5番は、華やかな祝典において初演された。

それは大成功を収めたにもかかわらず、翌年には全4楽章から3楽章に変更するなど大幅に改訂され、さらに推敲を重ね、1919年に最終稿が完成した。数年来の苦渋に満ちた作品に比べると、暗い影はあるものの、まばゆい輝きを放つ。戦争の時代を経て、彼が目指した方向は、モダンではなく、伝統への回帰であった。

第1楽章 テンポ・モルト・モデラート〜アレグロ・モデラート もとは独立していた二つの楽章がまとめられたため、前半はソナタ形式、後半はスケルツォで構成される。ティンパニのトレモロを背景に第1主題がホルンと木管楽器の応答で浮かび上がり、第2主題は木管に現れる。再現部の第1主題から3拍子のスケルツォ主題が導き出され、そのままトランペットの終結主題まで大きく高まる。

第2楽章 アンダンテ・モッソ、クワジ・アレグレット 管楽器に導かれ、ヴィオラとチェロのピッツィカート、フルートによる民謡風の主題が変奏される。穏やかだが、弦楽器のトレモロに不安が映され、威嚇的な金管で緊張感が生まれる。

第3楽章 アレグロ・モルト 快活な弦楽器に続いて、揺れ動くホルンと木管による「白鳥賛歌」が現れる。この主題は後半でトランペットに現れ、長いクレッシェンドは「人生の苦悩」を暗示する。最後は勝利の六つの和音で力強く締めくくる。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1914~15年、1916年(第2稿)、1919年(最終稿)／初演：1915年12月8日、ヘルシンキ／演奏時間：約30分

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

4/27

土曜マチネー

4/28

日曜マチネー

プロコフィエフ

交響曲 第1番 二長調 作品25 〈古典〉

少年時代よりピアノ演奏と作曲に無類の才能を発揮していたセルゲイ・プロコフィエフ(1891～1953)だが、13歳から約10年間を過ごしたサンクトペテルブルク音楽院では、和声や管弦楽法などを習っていたリヤードフやリムスキー＝コルサコフらの教授陣に対し、反抗的な態度をとる問題児だった。在学中にはメカニカルな快感を前面に打ち出したピアノ協奏曲第1番・第2番を発表して賛否両論を巻き起こし、卒業後にはパリやロンドンなどで最先端の音楽を吸収。バレエ・リュス(ロシア・バレエ団)のために書いた〈スキタイ組曲「アラとロリー」〉(1916年初演)では、ストラヴィンスキーの問題作〈春の祭典〉^{はるふつ}を彷彿させるバーバリズムにより、一躍モダニズムの旗手として注目を集めたのである。

そうした中でプロコフィエフは、音楽院時代に研究したハイドンの作風を参考に新作を構想。古典派音楽の構成をベースにしながらも、自らが習得した和声法や得意とする転調^いの妙を活かし、単なる模倣に終わらない独創性をスコア(総譜)に投影させたのである。2管編成で打楽器はティンパニのみというオーケストラは、まさに18世紀(ハイドン～モーツァルトの時代)のスタイルであり、実に可愛らしく魅力的な小交響曲となった。

プロコフィエフはこの交響曲を1918年4月に、ペトログラード(第1次世界大戦の勃発を機に改称された旧サンクトペテルブルク)で、自身の指揮により初演。しかしその1か月後には革命によって変貌^{へんぼう}した祖国を後にし、日本を経てアメリカへと移住している。なお、第3楽章は後にバレエ〈ロミオとジュリエット〉に転用されたため、バレエファンにはなじみ深いかもしれない。

第1楽章 アレグロ、二長調、ソナタ形式。**第2楽章** ラルゲット、イ長調、三部形式。**第3楽章** ガヴォット：ノン・トロップ・アレグロ、二長調、三部形式。**第4楽章** フィナーレ：モルト・ヴィヴァーチェ、二長調、ソナタ形式。

〈オヤマダアツシ 音楽ライター〉

作曲：1916～1917年／初演：1918年4月21日、ペトログラード(現サンクトペテルブルク)／

演奏時間：約14分

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部

カサド

チェロ協奏曲 二短調

ガスパール・カサド(1897～1966)の名前は、スペインが生んだ20世紀を代表するチェリストとして広く知られ、1959年に結婚した原智恵子(ピアニスト)とのデュオも、2001年に死去した彼女の再評価と共に注目を集めた。カタルーニャ地方のバルセロナに生まれたカサドは、9歳の時に行ったりサイタルで名匠パブロ・カザルスに見出され、その後は陽の当たる演奏家人生を歩んでいる。その一方で、作曲家・編曲家としてもチェロのために多数の作品(オリジナル作品、他の作曲家による作品をチェロ用に編曲・移行したものなど)を残し、さらには弦楽四重奏曲やギターのための曲もあるなど、まだまだ発掘しがいのある音楽家だといえるだろう。

1926年にカサド自身の独奏、作品を献呈したパブロ・カザルスの指揮で初演されたチェロ協奏曲は、演奏される機会が少ないものの、同時期に書かれた無伴奏チェロ組曲と並んでカサドの作風を知ることができる作品である。

第1楽章 アレグロ・ノン・トロップ 短いオーケストラの序奏に続き、独奏チェロがやや悲痛な味わいの第1主題を明確に提示。しばらくその雰囲気が続ぎ、オーケストラが祭典風の音楽を奏でると、まったく雰囲気の違う開放的な第2主題(作曲を師事したモーリス・ラヴェルの影響が強いとされる)がクラリネットを筆頭とする管楽器で提示される。夢見のような雰囲気の音楽が続く中、いくつかのモチーフが演奏され、全体的にはラブソディックに音楽が展開していく。

第2楽章 アンダンテ・コン・センチメント・アウステロ 瞑想的な雰囲気の中、独奏チェロがエキゾチックな香りのする主題を演奏。装飾的かつラブソディックなパッセージを紡いでいく中、オーケストラが多彩な表情を見せながら独奏チェロを支えていく。楽章の後半は、日本の民謡を連想させる行進曲調の音楽となる。

〈オヤマダアツシ 音楽ライター〉

作曲：1920年代中盤／初演：1926年、バルセロナ／演奏時間：約30分

楽器編成／フルート2、オーボエ、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、打楽器(トライアングル、タンブリン)、ハープ、弦五部、独奏チェロ

4/27

土曜マチネー

4/28

日曜マチネー

4/27

土曜マチネー

4/28

日曜マチネー

ムソルグスキー (ラヴェル編)

組曲〈展覧会の絵〉

全10曲の小品に加え、「プロムナード」と題された接続曲で構成されている〈展覧会の絵〉は、作曲者のモデスト・ムソルグスキー（1839～81）が35歳のときに作曲したピアノのための組曲である。盟友だったヴィクトル・ガルトマン（画家、建築家）が急逝し、その追悼遺作展を訪れたムソルグスキーは、展示されていた水彩画やデザイン画、舞台セットや衣裳などにあらためて感銘を受け、そこからインスパイアされた感情や空想などを音楽化することを思いついた。しかしながら、すべての曲が展示作品から靈感を受けたものではないようで、各曲のモチーフについては未だに謎が残されている（ゆえに私たち聴き手は、各曲の題名から連想される風景などを自由に思い浮かべながら聴いてもいいだろう）。

この作品は残念ながら生前には演奏されず、死後になって出版されても大きな話題にはならなかった。現在のような人気を得たのはムソルグスキーの没後、41年もたった1922年のことである。ロシア出身の指揮者セルゲイ・クーセヴィツキーが、フランスの作曲家モーリス・ラヴェル（1875～1937）に管弦楽編曲を依頼。彼の巧妙なオーケストレーションによってフランス音楽の香りをまとった作品に変貌し、作曲者のあずかり知らないところで人気作となってしまったのである。

ラヴェルは原作の味わいを活かしつつ、さまざまなアイデアを駆使して管弦楽編曲を行っている。たとえば、冒頭「プロムナード」でのトランペット・ソロ、「古城」におけるアルトサクソフォンの起用、「ビドロ（牛車）」におけるバリトン・ソロ、「殻をつけた雛鳥のバレエ」における木管楽器の軽快な動きなど、すべての楽器にスポットライトを当てるといって、いわば「管弦楽のための協奏曲」としての存在価値さえ追求しているのだ。また「プロムナード」は合計4回登場するが、それぞれに雰囲気異なり、まるでムソルグスキーの心情を表現しているようでもある。

〈オヤマダアツシ 音楽ライター〉

作曲：1874年（原曲）／初演：（ラヴェル編）1922年10月19日、パリ／演奏時間：約35分

楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ3（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、アルトサクソフォン、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、バリトン、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、トライアングル、サスペンデッド・シンバル、小太鼓、ムチ、ラチェット、シロフォン、グロッケンシュピール、銅鑼、チューブラーベル）、ハープ2、チェレスタ、弦五部